運定め　　鹿児島県

昔あったんことぬ

むかし、あるところに、魚釣りの大好きな男の人がいました。毎日、夜明けから起きて、海辺に魚釣りに行きました。

ある朝のこと、海辺に来てみると、まだ潮(しお)が満ちていたので、潮が引くのを待つことにしました。よいあんばいに、そばに寄木(よりき)（流木）がころがっていたので、男の人は、寄木をまくらにして休んでいるうちに、ついうつらうつら居眠りしてしまいました。

しばらくすると、波打ちぎわから、声がしました。

「寄木殿(どの)、寄木殿。村でお産があるから、いっしょに行って、生まれた子の運を定めてきましょう」

すると、男の人がまくらにしていた寄木が、

「わしは、ひょうしの悪いことに、今、お客にまくらにされていて、動くことができません。めんどうだが、今日は、ひとりで行ってくれませんか」と答えました。

男の人は、この話を聞いて、ふしぎなこともあるなあと思いましたが、知らないふりをして寝ていました。

しばらくすると、

「今もどってきました」と、さっきの声がいいました。すると、寄木が、

「それは、ご苦労さまでした。して、運はどう定めましたか」とききました。

「はい。生まれたのは女の子で、十八の年に塩道(しおみち)の村へ嫁(よめ)に行くが、その日は曇りもしないのににわかに雨が降って、とちゅうの岩かげに雨宿りしているところを、岩がくずれて下敷きになって、死んでしまいます。でも、うまくこの運を逃(のが)れることができたら、七つの倉を建てるだけの幸運が得られます」

男の人は、いよいよふしぎに思いました。けれども、いつものように釣りをして、家に帰りました。帰ってみると、女の子が生まれていました。男の人は、海辺で聞いた話は、自分の娘のことだと気づきました。けれども、この話はだれにも語りませんでした。

娘は、十八歳になると、塩道の村に嫁入りすることになりました。

その前の晩、男の人は、一生けんめいに、蓑笠(みのかさ)を作りました。家の人たちは、

「今ごろ蓑笠なんか作って、どうしたんだ」といいましたが、男の人は何もいわずに作

り上げました。

あくる日は、とてもいいお天気でした。にぎやかに嫁入り行列が出発しました。男の人も娘に付きそっていきました。

とちゅうで、いきなり、にわか雨が降ってきました。娘はあわてて岩の下に雨宿りしようとしました。男の人は、「今だ」と思って、娘に蓑笠を着せると、娘を引っぱって、大雨の中を、どんどん塩道の村まで歩いていきました。

あくる朝、みんながもどってくると、娘が雨宿りしようとした岩は、すっかりくずれていました。娘は、父親のおかげで、災難（さいなん）から逃れることができました。そして、七つの倉を建てる大金持ちになったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『鹿児島県喜界島昔話集』岩倉市郎／三省堂